

「自分のような年長者が土木賞を受賞して若い人々の席をふさいで申し訳けない」と受賞の感想を語る永田さんは、わが国のダム技術の第一人者としてその名声は広く内外にひびきわたっている。大正 11 年に東大土木工学科を卒業してから今日まで常に土木技術の向上と国土開発につくし、昭和 28 年から完成に至るまで 3 年半年の間は佐久間ダム建設所長として現場で陣頭指揮にあたられたのをはじめ、わが国の代表的な重力ダムの中に数えられる奥只見ダム、田子倉ダムなどを手がけられた。これら 3 つのダムは高さ 150 m にもおよぶ大ダムであり、そのコンクリートの総量は約 4 700 000 m³ にも達したといわれる。しかしこれらのダム建設においてコンクリートの製造方法には一貫した方針がなく、佐久間では中庸熱セメントのみを、奥只見ダムでは中庸熱の一部をフライアッシュで置き換えて使用し、田子倉ではこの両種のコンクリートを併用して使用するなど三様三様の方法がとられ、現場でいろいろ苦労された永田さんは「よし、おれが多くの技術者が便利のようにこれら一つとりまとめてやろう」と思い立たれ、これらのダムに関する骨材の生産、コンクリートに関するぼう大な資



永田 年氏

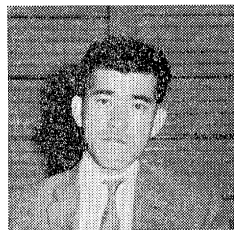
大正 11 年東京大学工学部卒・昭和 16 年 12 月日本発送電 KK 技師・昭和 23 年 7 月同理事・昭和 26 年 5 月北海道電力 KK 副社長・昭和 27 年 10 月電源開発 KK 理事・現在東京電力 KK 技術顧問・工博

料をとりまとめ「ダム コンクリートの品質管理について」と題して公表された。これが今回の受賞論文である。学生時代永田さんは瀬戸内海を埋立てるといような大きな夢をもっておられたそうである。その夢が土木技術者として実を結び、国際的視野に立って若い人々を指導される永田さんは 3 回にわたり、国際大ダム会議執行理事会に日本の団長として出席され広く海外を見聞され、また、36 年度は土木学会会長として学会経営にタッチされるなどその公共心はとどまるどころを知らない。こうした多忙の中で執筆にあたられた論文について

は割付から校正など最後までご自分の責任において処置され、その責任感の強さには、心うたれるものがある。永田さんとお話していると、あるときはその情熱にうたれ心がふるい立ち、またときには慈父のような親しみを感じ自然に心がなごやむ。その高きよき人柄は多くの若い技術者を育成された。吉田賞審査委員長、土木賞受賞者として今年の総会に出席した永田さんは吉田賞委員長席から受賞報告をするあい間しきりにシャッターを切っておられた。永田さんのご趣味はカメラとのこと、そのけっ作が学会誌の口絵をかざる日を楽しみにしよう。

マルパッセダムの崩潰はダム地盤に対するいままでの考えかたを改めるよい機会でもあったわけで日本においてもその影響は多分にあった。おりから工事中の関西電力「黒四ダム」は世界銀行からの融資の関係でこの面からも大きな検討がくわえられた。高野稔さんは当時先日完成をみた黒四ダムで実際に作業をなされていた方で 23 年東大工学部卒業の青年技術者であり現在はその持たれる技術を十分に活用されるためさるコンサルタントに勤務されておられる。その学生時代は非常に淡泊な性格で何かとすさんでいた世の中において仲間達に与えた印象はさすがにいいものがあつたと聞く。卒業論文は現在東大生研におられる岡本舜三先生のもでなされ一見野人の風格はあるもその学問に対する態度には繊細な感覚がみられ貴重な存在であった。最近は少し太られたように見えるがダムとともに今日まで歩まれてきた人とは初対面のものには思えないほど静かな学究的風格が最近増してきた。

土木学会誌 4 月号に載った黒四朝日賞受賞記念座談会の席上、関電の野瀬さん、吉田さん、芳賀さんが口をそろえて高野さんの人柄とその手腕をほめておられたが実



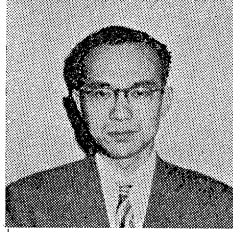
高野 稔氏

昭和 23 年東大第二工学部土木工学科卒・昭和 26 年日本発送電 KK 勤務・昭和 38 年 1 月関西電力 KK 勤務・現在八千代エンジニアリング KK 勤務・MASCE に推挙する・工博

際この工事にあつては、幹部と若手の間にあつて大変御苦労されたと言われていた。今般の受賞論文「アーチダムの基盤の安全性に対する実験的検討方法に関する研究」は、この黒四建設工事の激務の中で完成された論文で、日本ではこの学問分野は未開拓の分野でありその御苦労も大変であったと思う。黒四の現場技術者としてこの問題は絶対解決を与えねばならない命題であったと語る高野さんは、その苦心談を「現場にあつてこのような研究を完成する場合最も大きな障害となることは目前に迫った現場の問題と学問的研究とのバランスである

うが、それにも増して大切な事はこれに関係して生じてくるところの対人関係問題である」と語る。幸いにしてこの現場には野瀬さんをはじめとして理解ある上司がおられたこと、また、会社が研究に対して特に理解を示してくれた事を忘れることはできないだろう。若い技術者に進むべき道と場を与えたとき、その前途は祝福に値するのを見る。酒は好きなほうでしてと語る高野さんはなかなかの酒徒であり人里離れた建設現場に生活した男の体臭は話の間々に散見できる。スキーを愛好されると聞く俊英、自重して大成されんことを祈るものである。

神奈川県に白糸橋という橋がある。曲線橋として特異な存在であるがこの曲線が若き日の芳村さんをして基礎研究の重大さを意識せしめたようである。論文「①曲線直交異方性扇形平板の曲げについて ②曲線直交異方性変厚扇形平板の曲げについて」は、昭和 33 年芳村さんが上京されて工事見学をなされ、この白糸橋の美しさに胸うたれたときにその源をみ北海道の自然がそれをはぐくみここに美しく開花した大輪である。昭和 32 年北海道大学大学院修士課程を修了されたあと大学に残られ以来研究一途の毎日は氏にとって楽しい日々であったと聞く。このたびの受賞論文はいわゆる土木の現場から生まれだしたものとは少々趣きを異にするともいえるほど純理論に近い労作であり、これを完成させられるまでのご苦労は大変であったらうと思われる。最近よく討論されることに土木の細分化と総合の問題がある。芳村さんはこの問題に大変興味をお持ちとのことなのでおたづねしたところ、工学と理学に分化した今日、構造物を厳密に解析しようとするとき等到大変不便をみる。このとき両者の間に共通の場があった場合、何かとよい雰囲気が生じよりよい進展がみられるのではないかと総合



芳村 仁 氏

昭和 30 年北海道大学工学部土木科卒・昭和 32 年北海道大学大学院修士課程修了・昭和 32 年 4 月北海道大学工学部講師・昭和 33 年 4 月同助教授・昭和 38 年 3 月・工博

があるそうである。数式や公式をコツコツとあたってゆく努力は、永田先輩の言を借りるまでもなく、「きびしい」の一語につきよう。幸いにして良き師と周囲の人々の愛情にはぐまれてはえある今回の受賞を迎えられたことは何にもましてこれら人々への花束となったことだろう。静かな、あまりにも平凡な芳村さんのこと、今日の榮譽におごることなく自重研究されて日本の基礎理論をして世界に誇れるものとしていただきたいものである。

化への意見を述べられた。さらに私は若いのが前置きして構造物のみに限定せず土を考えた構造物の問題をやってみたくと語られる。わきみもせず北海道の豊かな自然の中で研究三昧にふけられる芳村さんは理論屋特有の性格の強さをところどころに見せて、この栄えある受賞の喜びを語られた。

ひとつの論文なり研究を完成させてゆく過程には、細心な注意と旺盛な研究心の積み上げが必要なのは言うまでもない。芳村さんによれば参考文献、とくに外国の論文なども、いろいろチェックしないとミスプリントを見逃して、あとで苦労すること

があるそうである。数式や公式をコツコツとあたってゆく努力は、永田先輩の言を借りるまでもなく、「きびしい」の一語につきよう。

幸いにして良き師と周囲の人々の愛情にはぐまれてはえある今回の受賞を迎えられたことは何にもましてこれら人々への花束となったことだろう。

静かな、あまりにも平凡な芳村さんのこと、今日の榮譽におごることなく自重研究されて日本の基礎理論をして世界に誇れるものとしていただきたいものである。

「新制高等学校第一回の卒業で、大学へゆこうと思ったのですが、長野の実家の都合で進学を見あわせ、やむなく豊橋市役所へ勤務しました。当時役所で水道課長をしておられた方が『大学を出なければだめだ』と忠告して下さいだったので、無理をしておして大学へ進んだわけです。国の盛衰に関係なく土木の仕事は安定しておくことも魅力でしたが、やはり今日ふりかえてみますと、この道へ入ったことは私にとってよかったです。ゆっくりとした口調で語られる土屋義人さんはその専攻されている水理学のホープとして、恵まれた環境の京都大学で研究の毎日を送られている。



土屋 義 人 氏

昭和 29 年名古屋工業大学土木工学科卒・昭和 31 年京都大学大学院工学研究科修了・名古屋工大講師を経て昭和 36 年 4 月京都大学助教授（防災研究所）現在に至る

「①滑面水陸床の下流端における洗掘限界、②水門下流部における洗掘限界に関する研究」は水門下流部の洗掘現象に関する理論とぼう大な実験的研究にもとづき理論の妥当性を研究、これを使って水門下流部の水たたきの長さを設計するための基礎資料を提出したものであり、今日まで不明確であった砂礫の移動限界に新しい提案をおこなっており貴重であると聞いている。石原藤次郎先生、岩垣雄一先生をはじめとして良き師は京都に学ぶ土屋義人さんをして水理学の道へとすすめたわけである

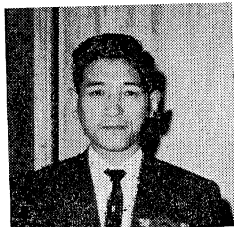
が、その指導のもとでコツコツと研究にはげまれ今回の栄えある受賞をみたとき、氏は恩師へその万分の一ではあるが御恩がえしのできたと大変喜ばれていたと聞く。

師を思い、そしてこれに教えを受けた土屋さんも立派であったが野にあった英才を今日ここまで指導された先生方も偉大であったと考えられる。みずずかる信濃と詠われた信濃路に生をうけ伝統ある教育のこのころいきは逆境にあって始めてその芽をふき、大変であったであろう大学、大学院の毎日は今日の風格をして研究者としての基礎を造りあげた。水理学の世界は今日まで

まだ完全とはいいがたいものがある。このことはすなわち未開の地に対する魅力と同様絶大なものがある。しかし、この水理学の分野は想像を絶する困苦をとまなう。自然の力を知り、水の恐しさをすることは国土を治める基盤となろう。

この雄大な研究対象を持たれる土屋さんはしあわせな人、今後ともがんばっていただきたいものである。温厚なこのひと京都の美しさのなかに今後とも研究に余念なかれんことを祈るものである。

「昔工兵隊で土木関係の仕事を手がけたことが動機となって土木工学科を選んだ」と折目正しく語る山崎さんの今回の受賞論文は「鉱物質微粉末がコンクリートのウォカピリチーにおよぼす効果に関する基礎研究」、「鉱物質微粉末がコンクリートの強度におよぼす効果に関する基礎研究」の二論文である。この論文が学会に提出されたとき、編集子はそのぼう大な資料を駆使した70ページにおよぶ内容にびっくりした。それでいてその原稿は一字一字でいねいに書かれていた。「非常に地味な研究だが、こういう研究を認めて下さって非常に感激している。昔吉田先生から、非常にむずかしい問題でも長い間やっていたら道が開けてくると教えられた。このお教えにしたがって長い間の集積という意味で、この論文をとりまとめることができた。また長い期間一つの問題を継続研究としてやらしてくれた環境、そういう点で自分一人の受賞でなく、この研究に対して協力していただいた多くの人々に対しての受賞だと思って非常に光栄に思う」と受賞の感想を語る山崎さんは謹厳実直、こうした性格がこのような地味な研究に取り組まされたのかも知れない。いま、山崎さんは日本セメントの研究所に



山崎 寛 司 氏

昭和 20 年陸軍士官学校卒業・昭和 24 年東京大学工学部土木工学科卒業・鹿島建設KKKに入社・昭和27年日本セメントKKKに入社
研究所に勤務現在に至る・工博

勤務し、機械、電気、化学など他部門の研究者と一緒に総合的な仕事をしておられる。従来ややもすると土木建築関係の技術者は、できた製品をうのみにしてコンクリートをつくる、というような状態もあったので、セメントをつくる人とセメントを利用する人がお互いに理解し、協力しなければよい製品や、よいコンクリートはできない、そういう意味で山崎さんは今後その中間に立ってつなぎの役をはたしたいと抱負を述べる。その責任感といい、お人柄といいまさに適任であろう。休日でもよく研究所に出ることが多いので家庭サービスが

できない由。趣味はこれといってとりたてていうものもっていない、という山崎さんは研究一途に多忙な日々を過され、研究そのものの中に人世の喜びを見出しておられるのだろう。

願わくばこのような地味な研究がこれからもどしどし出現して、他部門と土木が密接に結びついて、よりよい研究、より優れた材料が生れるようにお祈りする次第である。

無類の仕事好きが集まった国鉄東京工事局の全員で努力した結果に対する受賞で……良き協力者をもったことを本当に幸せに思っています……衆恩の有難さをしみじみと感じます……一瞬目を閉じた石田一郎氏の悩裏には、長い間苦労した人々の顔が走馬灯のように走りすぎたに違いない。

東京都の交通マヒを救う一助に建設された地下鉄4号線は都心部をまともに横切るだけでなく限られた工期にしばられて実に多くの問題があった。とくに有楽町付近の東海道本線との交差箇所は、高架橋をつぶすどころか列車の除行運転さえも許されない。営団から工事委託をうけた国鉄東工のスタッフは、学識経験者をまじえた建設委員会の指導の下に、石田氏を中心として地質調査、電子計算機使用による解析、光弾性実験など多くの模型実験を重ね、ついに世界でも例を見ない添えばりを用いるアンダーピニングという新工法を開発したのである。

自分で納得できないと着着いていられない性格だといわれる氏は、25年の長い技術者生活を通じて、やはり4号線の仕事が、あらゆる意味で一番勉強になったと述べられる。予算の問題を除けば、技術の世界で不可能と



石田 一 郎 氏

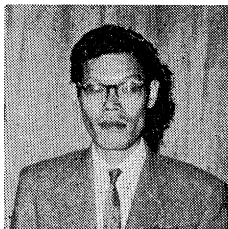
昭和 13 年京都大学工学部土木科卒業・現在日本国鉄道大阪工事局長・工博

いうことは一つもない、部下に対しても上下の区別より実行力と熱意によってその人物を評価すること、ファイトのある若い技術者をこよなく愛する由であった。小さいときからケンカは強かった。父も早く亡くしたし、いろいろな意味で母にはえらい苦労をかけてしまった、としみじみ話される石田さん……今回の受賞式には母上も列席され、つつましく御子息の栄えある姿を見守っておられた。

石田さんが現在、一番気にかかっていることは、もし東京に関東大震災級の地震、また伊勢湾クラスの台風が襲来したらどう

なるかということである。首都東京に住む国民の命と財産を守るために技術者として大いに政府に働きかけるべきだと強調する。昔の大震災のときはまだ人々がお互いにいたわり合う美風があったが現代では混乱が起ればお互いに傷つけあいかねないとなげくあたりは、人つくりが強調される世相に対する痛烈な警告とも思える。冬山のスキー、柔道、囲碁、ゴルフと趣味も広く、今後も皆で力を合わせて、むづかしい問題を解決してゆきたいと力強く抱負を述べられた。

昭和 22 年に東大土木工学科を卒業された村田さんは、学生時代を最も困難な時期にすごされたお一人である。戦後の資材不足のときに大学を卒業、山梨大学へ赴任され 4 年ほどして今までのご研究が一段落したので、つぎの研究をやろうと志し、いろいろ手がかけられたが、実験をするにも満足な試験器具がえられずご苦労されたとのこと。たまたまそんなときに東大国分教授から透水試験機を借りられたのがきっかけとなり水密性の実験をはじめられた。それを取りまとめた論文が今回の吉田賞受賞論文「コンクリートの水密性の研究」である。「恩師、吉田先生が勲奨賞として自分に下さったものとして、これからも頑張りたい、また実験にあたり終始ご懇篤なご指導をいただいた国分先生、その他いろいろお世話になった方々に感謝している」とけんきょに語る村田さんには、心からいい知れぬ親しみを感じる。現在は東京都立大学で教べんとられ若い人々のご指導にあたられている。「若い人は研究心が旺盛だから研究費に恵まれていないので、これからは自分ができる範囲で若い人達の手助けをして、若い人が研究をすすめることができるように協力したい」と常にご自分がご苦労された



村田 二郎氏

昭和 22 年東京大学土木工学科卒業・昭和 23 年山梨大学助教授・昭和 32 年東京都立大学助教授・現在に至る・工博

当時のことを忘れず、暖かいほほえみをたたえられる村田さん。学会でも多くの委員会に関係されいつも遅くまで取りまとめにあたられる村田さんの日々は全く忙しいの一語につきる。それでいて約束は守られ、趣味も広く、話題も豊富だ。いま軽演劇界で活躍中の「三木のり平さん」とは小学生のときの同級とのこと。そういった幅広いご交遊関係が堅い学問の生活とミックスされ形づくられたのが現在の村田さんかも知れない。最近の村田さんは「軽量骨材」や「異形鉄筋の定着」などに関するご研究を続けておられるとのことであるが、それら

の研究が完成されたとき、わが国のコンクリート工学界はさらに一步大きく前進したことになろう。そのほかにカクテルもご研究中とのこと。いろいろなコンクリートの配合などを手がかけられた村田さんのカクテルはその風味といい色あいといい超一流のものであろう。カクテルをつくりながらも村田さんはコンクリートの配合比のことに想いをよせられているのかも知れない。最後により上等なカクテルが生まれると同時に、すぐれたコンクリートのご研究が実を結ぶようにお祈りする次第である。

吉田研究奨励金授与者



小林 一輔氏
東京大学生産技術
研究所第五部



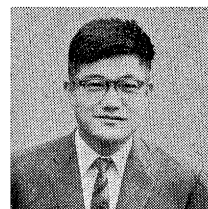
伊藤 利治氏
東京大学生産技術
研究所第五部



松本 嘉司氏
国鉄新幹線総局
作業局設計課



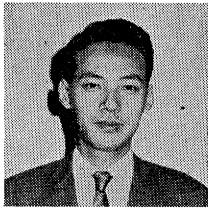
河野 清氏
小野田セメント
KK中央研究所



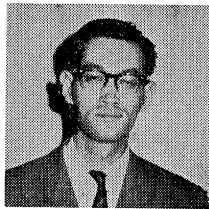
中山 紀男氏
日本セメントKK
研究所



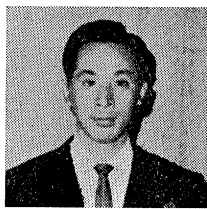
岡村 甫氏
東京大学工学部
土木工学科



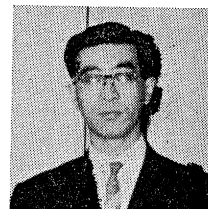
小柳 治氏
京都大学工学部
土木工学科



末永 保美氏
東京大学工学部
建築工学科



船越 稔氏
東京大学工学部
土木工学科



塚山 隆一氏
日本セメントKK
研究所